

# 教育研究所だより



No.242 令和7年3月14日 【発行者】守山市教育研究所 所長 脇阪 久徳  
守山市勝部三丁目9番1号(守山市生涯学習・教育研究センター 愛称:エルセンター 3・4階)  
TEL:077-583-4217 FAX:077-583-4237  
E-mail:kyoikukenkyu@city.moriyama.lg.jp  
HP:http://www.city.moriyama.lg.jp/kyoikukenkyu\_index.html

## 令和6年度 第4回 守山市初任者研修



令和7年2月4日(火)、第4回守山市初任者研修を実施しました。  
午前は、守山中学校 山本 凌矢 教諭による数学科(1年:データの活用)の授業を参観し、授業研究会を行いました。「本時の目標に迫る授業実践であったか」という視点で、成果と課題、改善策をグループで話し合ったり、学校教育課 西村 幸太 指導主事から授業づくりのポイントについて指導助言をいただいたりして、教科指導や支援のあり方の知見を深めることができました。



午後は、「先輩から学ぶ学級経営」と題して、守山南中学校 脇友美 教諭 と河西小学校 松本 直也 教諭のお二人からご講話をいただきました。



脇先生からは、「認め、つながり、つながれる」子どもたちを目指しての実践、松本先生からは、「学級づくりの3本柱」について具体的に教えていただきました。お二人の先生ともに目の前にいる子どもの姿だけを見ているのではなく、これから進んでいく先を見据えて子どもたちと関わっていることを学びました。

全4回の守山市初任者研修を無事に終えることができました。講師をお引き受けいただいた皆様ありがとうございました。全4回の研修では、教員として大切にしなければならないこと、守山市独自のシステムのこと等を学ぶことができました。研修で学んだことを活かして、授業づくりや子どもたちとの関係づくりに励んでいただきたいと思います。今後の活躍を楽しみにしています。



### 【初任者の感想(一部抜粋)】

- ・「自分の点数をどのように言い訳したらいいか考えよう」という課題で、子どもたちが前のめりになり、平均点を出した後で、「この言い訳で乗り切れる?」と揺さぶりをかけていた点が大変よかった。
- ・小学生の子どもたちが中学生になるとどのような内容を学ぶか、今の学年で学ぶことだけでなく、前の学年、次の学年では何を扱うかなどについても知識をもち、つなげていく授業ができるようになりたい。
- ・学級目標を決めるだけでなく、決めた目標を振り返ることや子どもたちに返していくことを意識していきたいと感じた。
- ・「行事はもちろん大切。でも、もっと大切なのは毎日のなんでもない日常。」という言葉が心に残った。学級の土台として「所属感」「安心感」が必要不可欠であることに気づいた。

# 今年度の研究について



## 教育に関する調査研究

★研究主題 『新たな不登校を生まない学校における視点を考える』

### ★研究の内容

今年度、市が取りまとめる月例報告において、新たに不登校傾向がみられる児童生徒と不登校の状態から回復できた児童生徒について、現状や過去の欠席日数、教員の対応等についてアンケート調査や聞き取り調査を行いました。また、その調査から課題を探り、検証を行う中で、新たな不登校を生まないための学校における視点を見出しました。

### ★研究の成果

調査から前年度90日以上欠席している児童生徒については、今年度そのほとんどが不登校の状態が続いていることや、本市の小学校1、2年生で行っている「読み書きチェック」では、不登校に初めてなった学年が低学年ほど、「読み書きチェック」の誤答数が多いことが分かりました。これらは、本市の児童生徒のデータから見出すことができたものであり、今後、市内の教職員が不登校をより身近なこととして捉え、日々の実践につながるよう周知に努めていきたいです。

### ★課題および今後の方向性

不登校は今日的な課題となりつつも、学校現場では突発的な生徒指導対応や日々の業務に追われ、初期対応が遅れたり、教職員の経験等だけで対応が進められたりするなどの課題があります。そのため、今回の研究成果（新たな不登校を生まないための視点）を分かりやすく学校現場に伝え、教職員のアセスメントの視点を広げることができるよう積極的に発信を行っていきたいと考えています。



研究において、お忙しい中、アンケート調査や聞き取り調査にご協力いただきました先生方、本当にありがとうございました。来年度も、本研究所の研究にご協力をよろしく願いいたします。

## 今年度のおわりにあたりまして

令和4年答申<sup>注</sup>に、次のような記述があります。

主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデルである。「令和の日本型学校教育」を実現するためには、子どもたちの学びの転換とともに、教師自身の学び(研修観)の転換を図る必要がある。(第1部総論「新たな教師の学びの姿」より)

私たちは、これからの研修は参加者が「やらされ感」をもって受講するのではなく、「参加者が主語となる研修」「学びたいと思える研修」であるべきと考え、「教育に特化した内容だけでなく、幅広い知識や教養に触れるような研修や、少しリフレッシュできる研修も企画したらどうか、また、働き方改革の観点から時期や時間設定はこれでよいのか」など、内容や時期・時間も含め検討してきました。まだまだ至らない点ばかりですが、少しでも「新たな教師の学びの姿」に近づけていきたいと考えております。また、研究事業では、喫緊の教育課題である不登校について「新たな不登校を生まない学校における視点」を研究主題として研究を進めております。来年度は、学校現場に足を運び先生方の実践力向上に繋がるよう研究を進めてまいります。

これからも教育研究所では、学校現場および教職員から信頼され頼りにされる教育研究所であるよう、現場の思いを大切にしながら研修および研究を進めて参ります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが、今年度の研究所事業推進に際して、ご指導ご協力を賜りました多くの皆様に、所員一同心より感謝を申しあげます。

今後とも、ご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

所員一同

注) 令和4年答申 「令和の日本型学校教育」を担う 教師の養成・採用・研修等の在り方について

～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～ 令和4年12月